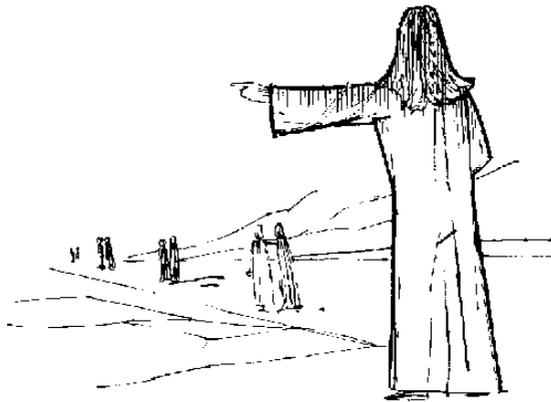


聖霊降臨後第2主日

2020年6月14日

ただで受けたのだから、ただで与えなさい



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

ただで受けたのだから、ただで与えなさい

司祭 シモン 林永寅

今日、私たちがご一緒に読んだマタイ福音書には先ず、イエス様が御国の福音を宣べ伝えられ、あらゆる病気と患いをいやされる内容が記されています。そして12人の弟子たちに汚れた霊に対する権能をお授けになり、派遣なさる内容が記されています。この時、イエス様は「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」ともおっしゃいました。このみ言葉は「宣教のために祈りなさい」という意味としても理解されます。御国のために弟子たちがたくさん必要であるからです。最後にイエス様は弟子たちに、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」とおっしゃいました。

私が聖三一教会に赴任してまもなく、教会のホームページ担当の方から、「大切に思っている聖句は何ですか」と聞かれました。ホームページの牧師紹介に載せるためでした。急な質問だったのでつい私が韓国で働いていた時センターの壁にかけてあった聖句を答えたのでした。それが今日ご一緒に読んだ福音書に出てくる最後のみ言葉です。

「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」(マタイ10:8)

私がこのみ言葉を壁にかけておいた所はホームレスのために無料給食をやっていた食堂でした。そこで毎日250~300人に食事を提供していました。給食の費用はほとんど寄付と募金によって賄いました。ですから、その無料給食はただで受けたのですから、ただで与えたのでした。このみ言葉は、そこで働いていたスタッフとボランティアに自分

たちがしていることの意味をきちんと教えてくれたと思います。

ところで、この聖書のみ言葉を繰り返して読んでみると、また別の教えもありました。即ち、このみ言葉は、宣教をする時どんな思いと心構えをもってやらなければならないのかを教えてくれるみ言葉でもありました。ある意味で宣教をすることは、神様から受けたものを神様にささげることです。したがって、自分のことを伝えるのではなく、神様のみ言葉、福音を宣べ伝えるのでなければなりません。神様を誇りとしていなければならないのです。宣教の核心は神様のみ言葉を宣べ伝えることです。神様からいただいたみ言葉を隣人と分かち合う心でないと宣教の実を得るのは難しくなります。

また一方で、宣教をする際には意欲とか自分の能力だけで始めてはならないのです。それを教えてくれるみ言葉が、「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない」というみ言葉です。このみ言葉は、イエス様が異邦人に対して偏見を持っていらっしゃるのではないかと、差別していらっしゃるのではないかと感じられますし、このマタイ福音書を書いたマタイが偏見や差別意識を持っているのではないかと感じられることもあります。けれども、イエス様とマタイが偏見や差別意識を持っているわけではありません。それが分かる端的な例として、マタイは、イエス様がお生まれになると異邦人である東方博士が訪れる出来事を記しており、「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる」(マタイ 24:14)というイエス様のみ言葉を記していたということが挙げられます。また、マタイ福音書にはイエス様が異邦人に福音を宣べ伝え、癒してくださる姿も記されています。百人隊長の僕(マタイ8:5)とカナンの女性の娘(マタイ15:22)の癒しの出来事とその例です。したがって、聖書に記されているイエス様のみ言葉は、「弟子たちにとって初めての宣教の旅なので、あまり遠くまで行ってはいけない」ということを教えてくださるためのみ言葉であることが分かります。全ての仕事には順序があります。やる気だけで、

自分の能力だけを信じて無理してはいけませんね。現代の言葉でいえば、宣教にも戦略と戦術が必要であるということです。これはもしかしたら「宣教は身近なところから始めなさい」ということを教えてくださるメッセージであるかもしれません。

それでは今日ご一緒に読んだローマ書についてともに見てみましょう。ローマ書では神様との和解を勧める内容が記されています。ところで、この和解という言葉は一般的に、互いに争ったり、葛藤していたりする時、妥協したり、意見を調整したりして葛藤が解消されることを意味します。それである方は、「神様と争ったり、葛藤をしたりしたことがないのに、なぜ神様との和解が必要なのか」と問うかもしれません。世の中の言葉の使い方から理解すれば、その通りです。けれども、聖書と教会で使っている「和解」という言葉には、別の意味があります。それは、神様との正しい関係が回復されることです。神様から離れている人生から神様に戻ってくることであり、神様のみ言葉から離れている人生から、み言葉に従う人生に戻ってくることです。それで神様との和解はまず、聖書のみ言葉に従うことから始まり、そのみ言葉を宣べ伝え、自分のものを隣人と分かち合いながら生きていくことでもあります。このような人生を通して私たちは「救いの門」に入ることができると信じています。もちろんこれは難しい課題です。それゆえ、ある神学者は、神様との和解が自分にとって一生の課題であると言いました。

けれども、何より重要なのは私たちの心でしょう。それをよく教えてくれるみ言葉が今日ご一緒に読んだローマ書に記されています。それは、「神様を誇りとしている」(ロマ 5:11)人になることです。たとえみ言葉通り完全に生きることはできなくても、神様を誇りとして生きていけば、それが和解への道になり、宣教の一環となり、神様も喜ばれるに違いないからです。

今日ご一緒に読んだ旧約聖書には神様のみ言葉に従い、神様と和解して生きていく人々のための励ましのみ言葉がこのように記されています。

「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間においてわたしの宝となる。…あなたたちは、わたしにとって、…聖なる国民となる。」(出 19:5-6)

このみ言葉は神様がモーセにおっしゃったことです。モーセは山から下りてイスラエルの民にこのみ言葉を伝えました。すると、イスラエルの民は皆一斉にこのように答えました。

「わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います。」(出 19:8)

この応えに神様は喜ばれ、いつもイスラエルの民を守ってくれると約束なさいました。ですから、この応えが私たちの応えになれば、神様は喜ばれ、わたしたちに恵みを与えてくださるでしょう。

あと 3 週間もすれば、私たちは教会でともに礼拝をささげることができるようになると思います。たとえ皆が自由に参加できる礼拝ではなかったとしても、「公禱が始まる」という事実だけでも嬉しいことでしょう。皆さんもご安心できると思います。これから私たちは新しく始まるこの礼拝のために、新たな心を準備していきましょう。昔の信仰者たちが神殿礼拝のために清めの儀式をしたように、清い心を用意し、神様のみ言葉を守りながら生きていくという誓いをささげる準備をしていきましょう。その誓いは、神様を誇りとしながら生きて行くということでも良いですし、エジプトを脱出した民が答えた「わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います」という告白でも良いのです。皆さんのこのような準備は何より大切な捧げ物になるでしょう。そして神様は私たちの信仰をご覧になって喜ばれ、私たちの人生を聖なる人生に導いてくださるでしょう。

この一週、神様を誇りにし、神様とともに喜び、神様から授かったものを神様にささげる努力をする人生を通して、より豊かな恵みを受けられますように心からお祈りいたします。